

# 第三十八回 日蓮宗教学研究発表大会要旨

日時 昭和六十年十月三十一・十一月一日  
場所 身延山短期大学

## 「日蓮聖人の釈尊観」

菊 田 泰 孝

日蓮聖人の釈尊観・仏陀観については、様々な視点からの考察がなされている。いま問題となるのは、我々の信仰の対象である釈尊が、どのような仏格をもたれ、そして、釈尊の超勝性を示す主師親三徳義が如何なるものであるか。さらに釈尊と我々衆生との間には、どのような必然的連関性があるかという点である。

それらを明らかにする方法として、近代の先師がいかに聖人の釈尊観・仏陀観の研究をされて来たかを繙き、それを確認しておきたい。(一)

ところで、先師の研究によって理解できることは、聖

人の釈尊観は、寿量品の久遠開顯が骨格をなすということである。このことは釈尊の存在が、三世にわたる永遠性をもった絶対的存在であることを意味する。つまり、釈尊は歴史的限界を超越した存在であり、末法における我々の教主であることが看取できる。そして、これら先師の研究における共通の視点が主師親三徳義にあり、釈尊の超勝性の強調がみられる。

そこで、釈尊の超勝性である主師親三徳義に注目して、考察を進めてみたい。それは、釈尊が末法の衆生を救済されるにあたり、仏種たる妙法五字を我々衆生に下される教主であり、その教主釈尊と衆生との必然的連関性を看取できると思われるからである。換言すれば、釈尊は末法衆生に対して、妙法五字を下種するという能动性をもたれ、仏種を衆生に植えることによって衆生を救済されようとするのが、釈尊の誓願であると信解できる

からである。

さて、日蓮聖人における主師親三徳義は、『八宗違目鈔』(2)および『一代五時図』(3)に図示されている。

『八宗違目鈔』では、法華経譬喩品の文を三徳に配し、加えて仏の三身と三徳を相対して図化されている。

また、ここで注目すべきことは、寿量品の一節である「我亦為世父」と記され、主師親三徳義中、特に親の徳、すなわち父の徳に着目されていることであり、それは次下に、『五百問論』並びに『古今仏道論衡』の文を引用されていることによっても明らかである。

また、『一代五時図』引用の、『法華文句』および『文句記』の釈信解品によれば、長者窮子の長者を、天台大師は父の義が存する釈尊であると釈されている。

これら、遺文引用の論釈から領解できることは、聖人の親および父の概念には、衆生が成仏するための種、一念三千・因果具足の仏種は釈尊が具有され、且つ衆生に仏種を植えるという能動性を示すものと思われる。その対象である我々衆生は、その仏種が下される子ということになる。そこに釈尊と衆生との間は、下種を媒介として親と子・父と子という必然的連関性があると考えられる。

また、仏種の問題については、『開目抄』(4)における王と種の関連においても顕著であり、それは必然的に親の徳・父の徳に関わるものであると予想される。さらに『観心本尊抄』(5)の末法下種論からは、下種の導師としての釈尊観が問題とされると思われる。

なお、これらの事を踏まえ、聖人の釈尊観をさらに多面的に明らかにする必要があり、それを今後の課題としたい。

[註]

- (1) 大崎学報第五十九号所収、望月敏厚著「日蓮聖人の仏陀観」・茂田井先生古稀記念論文集『日蓮教学の諸問題』所収、渡辺宝陽著「日蓮聖人の釈尊観」・『法華仏教の仏陀論と衆生論』所収、上田本昌著「日蓮の仏陀観」・日本仏教学会編『釈尊観』所収、北川前登著「日蓮聖人の釈尊観」等を参考とした。

(2) 『定遺』五二六頁

(3) 『定遺』二三五八頁

(4) 『定遺』五七九頁

(5) 『定遺』七一五頁